ドイツ語の正書法—その歴史的展望と現状

須　嵜　文　明

Die Deutsche Rechtschreibung —ihre geschichtliche Aussicht und gegenwärtige Lage

Fumiaki SUSAKI

はじめに

1994 年 11 月 22 日～24 日にかけてウィーンでドイツ語の「正書法会議」が開かれた。そこで正書法の改正が決定された。これは旧正書法からは相当大幅な改正であった。要点は次の 6 項目。

1. 音声の表記法（外来語を含む）
2. 大文字書き　と　小文字書き
3. 分かち書き　と　一語書き
4. ハイフンの使い方
5. 句読法
6. 行末での分綴法

この「正書法」には 1996 年 7 月 1 日ドイツ、オーストリア、スイス、リヒテンシュタイン等が署名し、1998 年 8 月 1 日から実施された。ただし、2005 年までの 7 年間を「旧正書法」から「現行正書法」への移行期間とした。従って、旧正書法は直ちに誤りとはならないが、2005 年以降は誤りとなり、廃止された。本論では、現在の正書法に至るまでのドイツ語使用国（ドイツ、オーストリア、スイス等）での正書法をめぐる論議をまず解説し、その後に施行された正書法の基本形を略解する。

1. 正書法への道

ドイツ語は文字で書かれるようになってからおおよそ 1200 年になる。始めの頃は文字を使用したのは修道僧たちであった。彼らは従来普段書くときはラテン語を使っていたが、その後ドイツ語で書くようになった。しかし、当時は始めからドイツ語に対応する文字があった訳ではなかった。そこで、ラテン語の文字を使いラテン語の句読法に従ってドイツ語を書いていた。始めから確固とした正書法があったわけではないので、時と共にそれぞれの修道院や官庁ではそれぞれの地域で通用する慣習的書き方が作られていった。

これにも大きな問題があった。というのは、元々アルファベットはラテン語のための文字であり、

ドイツ語のためのものではなっかった。しかし、それを使ってドイツ語を表現する場合、アルファベットとドイツ語の音では一致しない事があった。例えば、a, e, i, o, u だけでドイツ語の母音の長短を表すには限界があったし、k, c, q などはドイツ語の音では区別出来なかった。

この様な点からして、古くからドイツ語の書き方に関する議論や書き方の規則化や統一化の動きは少なからずあった。最も古いものとして、オトフリート・フォン・ヴァイセンブルク（Otfrid von Weißenburg）は 1000 年以上も前にドイツ語で書くときの複雑さを訴えている。[*1]

ドイツ語の「書き方」を統一し簡素化しようという動きは既に 16 世紀の宗教改革以前からあった。都市文化が隆盛を極めるとそれに伴い読み書きを専門とする者が増え、街のあちらこちらに「書き方教室」が開設された。

印刷された本の市場もだんだん大きくなり、今までとは違って一地域を越えて通用する言葉や書き方への関心も興ってきた。

もちろん物事全て順調ではなかった。当然、この動きに反対する者も出てきた。ドイツは元々北から南まで方言の多い土地柄である。ましてや、過去の時代は今以上であった。中でも印刷に関わっていた者たちはこの「書き方」を統一し簡素化しようという動きに反対した。物書きや植字工なども同様であった。それは彼らの収入は仕事のページ数に左右されていたからであった。やがて、「書き方」の議論にその当時の一流の知識人も加わってきた。ニクラス・ヴィレ(Niklas Wyle), ヨハン・ピスカトール（Johann Piscator）, フィリップ・ツェーゼン（Philipp Zesen）, フィリップ・ハルスデルファー（Philipp Harsdörffer）, パウル・フレミング（Paul Fleming）, ユストゥス・ショッテル（Justus Schottel）, フリートリッヒ・ゴットリープ・クロップシュトック（Friedrich Gottlieb Klopstock）, ヨハン・クリストフ・ゴットシェート（Johann Christoph Gottsched）, ヤーコプ・グリム（Jacob Grimm）等。これらの全てが必ずしも同じ立場で議論に参加した訳ではなかった。例えば、ヤーコプ・グリム（Jacob Grimm）などは論文で "Mich schmerzt es tief gefunden zu haben, dasz kein volk unter allen, die mir bekannt sind, heute seine sprache so barbarisch schreibt wie das deutsche..."（私の知る人々の中で今日自分の言葉をドイツ人ほど乱暴な書き方をする人はいないということがわかってしまったのはとてもつらい）と嘆いている。[*2]

19 世紀後半になっても、まだ「統一した書き方」は出来てこなかった。例えば、出版関係では出版地域毎に、それどころか出版社毎に独自の「書き方基準」を作っていた。又、学校でも状況は同じ様なもので、個々の学校毎に独自の「書き方」、時には教室毎に違った「規則」を持っていた。こんな状況を見て、プロイセン政府は 1862 年に次のような政令を発令せざるを得なかった。[*3]

「ドイツ正書法及び句読法の原則に内在する不確実さは生徒たちの恣意或いは無頓着を猶予する理由とはならない。学校はこの点では習慣を通して確実になった物を下級及び中級クラスでは間違いなく使用出来るように訓練しなければならないし、多くの教師の合意を得た事を個々の教師は理論上の理由のために妨げることは許されない。」しかし、その効果はあまりなかった。

正書法統一化の動きが決定的になったのは 1871 年にドイツ帝国（第二帝国 1871 ～ 1918）が設立さ

れてからの事である。プロイセンは1872年帝国内の国々を「学校会議」に召集し、当時の文部大臣ファルク（Falk）に正書法の統一を任せた。それをうけて、彼は1876年ドイツ語正書法制定のための会議を招集した。これが今日第一回正書法会議と言われているものである。この会議にはコンラート・ドゥーデン（Konrad Duden）も専門家として招待されていた。しかし、この会議は成功しなかった。帝国の各国政府からこの会議の決議は時期尚早だとして拒否されてしまったからである。

この時コンラート・ドゥーデンはヘルスフェルト（Hersfeld）のギムナジウムの校長に就任したばかりであったが、これまで一貫してドイツ語正書法に取り組み、この時既に「ドイツ語正書法。語源提示の論文・規則・語彙一覧」（Die Deutsche Rechtschreibung. Abhandlungen, Regeln und Wörterverzeichnis mit etymologischen Angabe 1872）、「正書法入門。規則と語彙一覧」（Anleitung zur Rechtschreibung. Regel und Wörterverzeichnis, 1872）、「未来の正書法」（Zukunftsorthographie, 1876）を書き上げていた。

1901年再び正書法会議が開かれた。コンラート・ドゥーデンはこの間、すでに1880年に「完全版ドイツ語正書法辞典」（Vollständiges Orthographisches Wörterbuch der deutschen Sprache）を出版し、版を重ね早くも6版になっていた。その為、実際には相当程度統一化は進んでいた事になる。

コンラート・ドゥーデンは第一回正書法会議に参加して感銘を受け、その後辞書作りに入っていた。彼は統一正書法は徹底的な変更をあきらめなければ旨く行かないだろうと思い、近代的な統一正書法についての彼独自の（当時の時代からすれば遙かに進んだ）考えを自分の辞書に込めるのをあきらめた。そこでむしろプロイセンの委託を受けてゲルマニスト、ヴィルヘルム・ヴィルマンス（Wilhelm Wilmanns）が作った規則[*4]をドイツ語の語彙に応用する事にした。この時、ドゥーデンの辞書によって既に広められていた事もあって、1901年の第二回正書法会議でプロイセンの正書法は受け入れられた。この会議の成果は翌1902年に出版され[*5]、ドイツ連邦議会の決議をもってドイツ全土に義務づけられる事になった。オーストリア、スイスがこれに続いた。これをもって1902年に全てのドイツ語圏で通用するドイツ語正書法の公式規則が発布された。以後この規則はほぼ100年間効力を有する事となった。

2. 1901年以後

一応ドイツ語正書法は出来たが、満足すべき物ではなかった。多くはさらに改革は進むものと思っていたが、そうは行かなかった。その間、ドゥーデンは版を重ねる度に改良が進み、 紛らわしい場合には、ドゥーデンで採用された綴り方・規則が義務づけられると1955年ドイツの文部大臣会議の決議によって公式に認められるまでになった。

ドゥーデンによってなされた変更はもちろん徹底してはいなかったが、1915年の正書法ドゥーデンの第9版には句読法の規則が入れられた。言うまでもない事ではあるが、1901/1902年のドゥーデンの規則集には句読法の規則は入っていなかった。ドゥーデンは〝Buchdruckerduden（印刷業者用ドゥーデン）〟の中で「句読法の原則」を定義した。この原則は1915年の第9版に引き継がれた。

その後も正書法の改革論議は消える事はなかった。1901年の時既に専門家の間では第二回正書法会

議は改革の”終わり”ではなく、”始まり”を意味していた。なるほど”統一”は出来た。次は”簡素化”だ。この点から数えきれないほどの改革案が提案されたが、一つとして成功しなかった。なかでも第二次大戦後、特に1954年のシュトゥットガルト案と1958年のヴィースバーデン案は大いに注目された。両方ともドイツ語の小文字書きを主張していたが、上手く行かなかった。その後、議論はイデオロギー的になり、もはや客観的な議論はほとんど出来なくなってしまった。

その間にドイツ連邦共和国とドイツ民主共和国ではドイツ正書法の全般にわたる改良への学問的研究が始まった。その中心は西ドイツではマンハイムのドイツ語研究所の「正書法問題委員会」(Kommission für Rechtschreibfragen)であり、東ドイツでは「東ドイツ科学アカデミー付属言語中央研究所」(Zentralinstitut für Sprachwissenschaft an der Akademie der Wissenschaften der DDR) であった。当初は別々に行われていたが、1980年からは共同作業となった。後にはオーストリアの「教育芸術省正書法調整委員会学術作業部会」(Wissenschaftliche Arbeitsgruppe des Koordinationskomitees für Orthographie beim Bundesministerium für Unterricht und Kunst) が、スイスの「州教育委員長会議正書法改革作業部会」(Arbeitsgruppe Rechtschreibform der Schweizerischen Konferenz der kantonalen Erziehungsdirektoren) が加わった。

その作業はオーストリア政府の支援を受け、ウィーンでほとんど全てのドイツ語圏からの代表が集まって三回の会議が開かれた。第一回ウィーン会議1986年、第二回ウィーン会議1990年、第三回ウィーン会議1994年。中でも特に重要であったのは第一回会議であった。会議の締めくくりの声明の中で次のことが定義された。

「・・・1901年のベルリン正書法会議で達成されたドイツ正書法の統一規則を今日の要件に適合させる事に関しては原則的合意が得られた。特に問題なのは、正書法の多くの部分で時を経るに従って複雑になった規則を簡素化する事・・・」

研究の合い言葉は einheitlich と (ver)einfach(en) となった。

ウィーン会議では具体的な成果が得られた。1986年以前には専門家たちの作業は政治的バックアップを受けていた訳ではなかったし、彼らの作業の結果がいづれ改善されるとの展望もなかった。これが変わった。例えばドイツ連邦共和国ではが新規則の制作を正式に委任されたし、スイスでは学校長会議から同じ様な委託を受けた。委託した国家機関との緊密な結び付きで専門家グループは新規則を作り上げた。それは各国の共同声明の署名を持って1996年7月1日に発効した。

3. 正書法の実際

新正書法の要点は次の6項目である。

1. 音声の表記法（外来語を含む）
2. 大文字書きと小文字書き
3. 分かち書きと一語書き
4. ハイフンの使い方

5. 句読法

6. 行末での分綴法

以下個々にその概略を記す。詳しくは後述の文献を参照されたい。

1. 音声の表記法（外来語を含む）

(1) ウムラウト

派生もとの語幹が -a-/-au- は従来では -e-/-eu- であったが、現行正書法では -ä-/-äu- になる。

派生もと		旧正書法	現行正書法
Hand	>	behende	behände
Stange	>	Stengel	Stängel
blau	>	verbleuen	verbläuen
Aufwand	>	aufwendig	aufwändig (aufwendig も可)

(2) 短母音語の子音の重なり

現行正書法では保持された。

派生もと		旧正書法	現行正書法
Nummer	>	numerieren	nummerieren
Platz	>	plazieren	platzieren
Karamelle	>	Karamel	Karamell

(3) ß の扱い

長母音・複母音後の ß は従来どおり維持された。

旧正書法	現行正書法
Maß	Maß
Straße	Straße
draußen	draußen

短母音の後では従来後続する母音の有無によって -ß-/-ss- の使い分けがなされたが、新正書法では -ss- に統一された。

旧正書法	現行正書法
daß	dass
hassen/Haß	hassen/Hass
küssen/Kuß/sie küßten sich	küssen/Kuss/sie küssten sich
müssen/sie muß	müssen/sie muss

(4) 3 つの子音の連続

合成語を作る際、同じ子音が 3 つ連続する場合、旧正書法ではその内の 1 つを省略したが、現行正書法では 3 つ全て維持された。

合成もと	旧正書法	現行正書法
Schiff + Fahrt	Schiffahrt	Schifffahrt
Ballett + Tänzer	Ballettänzer	Balletttänzer
Stoff + fetzen	Stoffetzen	Stofffetzen

(5) 外来語

外来語に関しては従来の原語に基づく綴りとドイツ語化した綴りの両方が可能となった。

		旧正書法	現行正書法
ai	→ ai oder ä	Necessaire	Necessaire/Nessessär
ph	→ ph oder f	Geographie	Geographie/Geografie
gh	→ gh oder g	Spaghetti	Spaghetti/Spagetti
é und ée	→ é/ée oder ee	Exposé	Exposee/Exposé
qu	→ qu oder k	Kommuniqué	Kommuniqué/Kommunikee
ou	→ au oder u	Bouclé	Bouclé/Buklee
ch	→ ch oder sch	Chicorée	Chicorée/Schikoree
rh	→ rh oder r	Katarrh	Katarrh/Katarr
â	→ â oder a	Château	Château/Chateau
c	→ c oder ss	Facette	Facette/Fassette
th	→ th oder t	Panther	Panther/Panter
nn	→ nn oder n	Bonbonniere	Bonbonniere/Bonboniere

英語の -y で終わる名詞の複数形

Babies/Babys	Babys
Ladies/Ladys	Ladys

2. 大文字書きと小文字書き

文の始まりや名詞を大文字で書くのは従来通りであるが、旧正書法では小文字書きであったが、現行正書法では大文字書きになった。

(1) コロンの後に続く完全な文。

Lassen Sie bitte das Kleingedruckte: Sie ersparen sich viel Ärger.

(2) 前置詞または動詞と結びついた名詞

旧正書法	現行正書法
in bezug auf	in Bezug auf
radfahren	Rad fahren
schuld geben	Schuld geben

(3) 名詞化した形容詞

旧正書法	現行正書法
im allgemeinen	im Allgemeinen
es ist das beste, wenn-----	es ist das Beste, wenn------
im einzelnen	im Einzelnen
der, die, das letzte	der, die, das Letzte
alles übrige	alles Übrige

(4) 時間の名詞

旧正書法	現行正書法
heute mittag	heute Mittag
gestern abend	gestern Abend
Sonntag abends	sonntagabends

(5) 色、言語を表す名詞

旧正書法	現行正書法
auf deutsch	auf Deutsch

(6) 対になった無変化の形容詞

旧正書法	現行正書法
groß und klein	Groß und Klein
jung und alt	Jung und Alt

3. 分かち書きと一語書き

分かち書きか一語書きかは基本的にその語を語群と見るか複合語と見るかによる。語群ならば分か

ち書き、複合語ならば一語書きが原則である。また、判断に迷うような場合は書き手の意図にまかされる部分も残された。

(1) 動詞 ＋ 動詞

旧正書法	現行正書法
sitzenbleiben	sitzen bleiben
kennenlernen	kennen lernen
spazierengehen	spazieren gehen

(2) sein 動詞との構成語

旧正書法	現行正書法
zurücksein	zurück sein
lossein	los sein
dasein	da sein

(3) 名詞 ＋ 動詞

旧正書法	現行正書法
haltmachen	Halt machen
staubsaugen	Staub saugen
teppichklopfen	Teppich klopfen

(4) 副詞 ＋ 動詞

旧正書法	現行正書法
abwärtsgehen	abwärts gehen
aneinanderfügen	aneinander fügen
überhandnehmen	überhand nehmen

(5) 形容詞 ＋ 動詞

旧正書法	現行正書法
nahegehen	nahe gehen
gefangennehmen	gefangen nehmen
bekanntmachen	bekannt machen

(6) so, wie　+　形容詞 / 副詞

旧正書法	現行正書法
soviel	so viel
wieviel	wie viel

4. ハイフンの使い方

従来に比べて、構成部分を明確にしたり、誤解をさけるためにハイフンの使用範囲が大幅に拡大されている。

(1) 構成部分に固有名詞を含まない場合

旧正書法	現行正書法
S Kurve	S-Kurve
T Shirt	T-Shirt
8 Zylinder	8-Zylinder
100 prozentig	100-prozentig
der 17 Jährige	der 17-Jährige
D Zug Wagen	D-Zug-Wagen
Do it yourself Bewegung	Do-it-yourself-Bewegung
Musikerleben	Musiker-Leben
Musikerleben	Musik-Erleben

(2) 構成部分に固有名詞を含む場合

旧正書法	現行正書法
Goethe Ausgabe	Goethe-Ausgabe
München Ost	München-Ost
Frankfurt Hauptbahnhof	Frankfurt-Hauptbahnhof

5. 句読法

従来との違いは特にコンマの使用に見られる。又、書き手の判断に任される部分が従来より多くなっている。

(1) und / oder / beziehungsweise / sowie (=und) / wie (=und) / entweder.....oder / nicht.....noch / sowohl.....als (auch) / weder.....noch 等で結び付けられる文や句はコンマで区切らない。

Sie fuhr in die Stadt und er blieb zu Haus.

Ich hoffe, dass es dir gefällt und dass du zufrieden bist.

Sie fährt entweder mit dem Auto oder mit dem Zug.

もちろん書き手が文の理解のために必要だとするときにはコンマを付ける事が出来る。

Wir fahren in die Stadt, oder sie kommen übermorgen zu uns aufs Land.

(2) aber/doch/jedoch/sondern 等の逆説的に結び付けられる場合コンマを用いる。

Sie fährt nicht nur bei gutem, sondern auch bei schlechtem Wetter.

Der März war sonnig, aber kalt.

Er hat mir ein süßes, jedoch wohlschmeckendes Getränk eingeschenkt.

6. 行末での分綴法

「簡素化」・「見た目のわかりやすさ」・「理解のしやすさ」が基本原則である。

(1) -ck : 旧正書法では -ck の中で分けて、-k-k- としたが、現行正書法では -ck の前で分ける。

		旧正書法	現行正書法
Zucker	>	Zuk-ker	Zu-cker
Zicke	>	Zik-ke	Zi-cke
flicken	>	flik-ken	fli-cken
trocken	>	trok-ken	tro-cken
Backe	>	Bak-ke	Ba-cke

(2) -r, l, gn, kn : 従来は分けられなかったが、現行正書法では可能となった。
発音に従って分ける。ただし、従来の分け方も併用される。

		旧正書法	現行正書法
Quadrat	>	Qua-drat	Quad-rat
möbliert	>	mö-bliert	möb-liert
Mggnet	>	Ma-gnet	Mag-net

(3) 外来語は発音に従って分ける。又、語源に基づいた従来の分け方も併用される。

		旧正書法	現行正書法
Pädagogik	>	Päd-ago-gik	Pä-da-go-gik
parallel	>	par-al-lel	pa-ral-lel
Hilikopter	>	He-li-ko-pter	He-li-kop-ter

(4) 語源的には合成語であるが、今日ではそのようには思われない語も発音によって分けられる。また、従来の語源に基づく分け方も併用される。

		旧正書法	現行正書法
warum	>	war-um	wa-rum
hinauf	>	hin-auf	hi-nauf
beobachten	>	be-ob-ach-ten	beo-bach-ten

(5) 語頭の母音字も分けられる。

		旧正書法	現行正書法
Ufer	>	Ufer	U-fer
aber	>	aber	a-ber
Ofen	>	Ofen	O-fen

(6) -st- : st も分けられる。

		旧正書法	現行正書法
meistens	>	mei-stens	meis-tens
flüsten	>	flü-stern	flüs-tern
Muster	>	Mu-ster	Mus-ter

おわりに

今回の改革の基本原則は「簡素化する、見やすくする、分かりやすくする」であった。これはある程度は成功した。例えば、派生元の綴りを可能な限り保持するという語幹保持の原則である。従来は Schiff + Fahrt = Schiffahrt であったが、Schifffahrt になった。ß と ss の使い分けを単純化した。従来は ss の場合、前後が母音であり、しかも先行する母音が短母音の時に限り、それ以外は ß とつづったが、今度の規定では先行する母音が長母音・二重母音の場合 ß、その他の場合は ss になった。また、分かち書きを原則とし、一語書きを例外とする。kennenlernen → kennen lernen 行末での分綴の場合、-ck- は従来 -k-k- と分けたが、ck の前で分綴するようになった。Zucker は従来行末で Zuk-ker であったのが、Zu-cker と綴るようになった。このように改善された部分も多々あったが、しかし、この改革では無声の f には f、ff、v、ph、の 4 通りの表記が残ったままになったなど、まだまだ次回の改革を待たねばならない部分もある。

注

*1 Duden. Die Neuregelung der deutschen Rechtschreibung. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich 1996, S.15

*2 Ebd. S.17

*3 Ebd. S.17

*4. W. Wilmanns: Kommentar zur Preußischen Schulorthographie Berlin 1880

*5. Regeln für die deutsche Rechtschreibung nebst Wörterverzeichnis. Herausgegeben im auftrag des Königlich Preußischen Ministeriums der geistlichen, Unterrichts- und Medizinal-Angelegenheiten. Berlin 1902.

参考資料

ドイツ語「新正書法」ガイドブック　在間　進編　三修社　1997

Götze, Lutz : Was muss ich über die neue Rechtschreibung der deutschen Sprache wissen? Verlag für DEUTSCH 1996

Duden : Die Neuregelung der deutschen Rechtschreibung. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich 1996

Duden : Rechtschreibung der deutschen Sprache. 21., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage Duden Bd. 1 Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich 1996

Götze, Lutz : Die neue deutsche Rechtschreibung. Gütersloh 1996

(2006 年 9 月 25 日受理)